記号論入門

Yu. スチェパーノフ　　磯谷 孝・藤本 隆訳

勁草書房

記号論入門

Yu. スチェパーノフ　　磯谷 孝・藤本 隆訳

勁 草 書 房

訳者紹介
磯谷　孝（いそや　たかし）
1939年生れ，1963年東外大露語科卒
現在　東外大露語科教授
訳書　『ロシヤ・フォルマリズム論集』（共訳）
Yu. ロトマン『文学理論と構造主義』
Yu. ロトマン『文学と文化記号論』ほか
著書　『翻訳と文化の記号論』
藤本　隆（ふじもと　たかし）
1950年生れ，1980年東外大露語科修士過程終了

記号論入門

1980年11月10日　第1版第1刷発行
1984年7月20日　第1版第3刷発行

©著　者　Yu. S. スチェパーノフ
訳　者　磯谷　孝
藤本　隆
発行者　井村　寿二

発行所　株式会社　勁草書房
東京都文京区後楽2—23—15
電話（03）814-6861／振替東京5-175253

＊落丁本・乱丁本はお取替いたします。
港北出版印刷・和田製本
＊無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます。
＊定価はカバーに表示してあります。

3010-160203-1836

目次

序

第一章　事実とその最初の説明……5
(1) 記号論が研究する諸事実……5
(2) 記号論的思想の歴史から……17

第二章　現代記号論の諸潮流……33
(1) 生物記号論……33
(2) 人間記号論……39
(3) 言語記号論……55
現代言語学に照らして見た言語体系……56
言語構造と他の記号論的体系の構造におけるアナロジー……78
(4) 抽象的記号論……94

(5) 一般記号論……98

第三章　記号論の基本的法則……101

一　客観的諸法則（結合論）……103

(1) 記号体系。諸タイプの段階……103

(2) 記号。フレーゲの三角形……109

(3) 階層的構造……117

(4) 等価性……131

二　観察者の位置に依存する諸法則（実用論）……135

(5) 物質的なもの――観念的なもの……135

(6) 記号性の圏域。「言語――言語的でない言語――より言語的でない言語――非言語」……140

(7) 異質的記号系と同質的記号系。論理的パラドックス……152

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

(8) 記号の操作性……165
三　意味の諸法則（意味論）……170
(9) 「意味されるもの——意味するもの」の関係……170
(10) 「小宇宙——大宇宙」の関係……180
(11) 機能的意味論……183
原注……189
訳者あとがき……磯谷　孝……225

序

記号論（セミオティカ）とは、自然および社会における諸記号体系についての科学である。

記号論は、生体、自然および社会における通信と制御の過程を研究するサイバネティックスに近い。[1]

しかし記号論はなによりも次の点でサイバネティックスと異なる。すなわち、サイバネティックスはこの通信の動態的、量的側面を研究するのに対し、記号論（セミオティカ）は静態的、質的な側面を扱うのである。サイバネティックスは過程を、記号論はその中でそしてそれに基づいて過程が実現されるところの体系を研究する。この観点に立てば、記号論とサイバネティックスとの関係は、字母体系（アルファベット）とこのアルファベットに基づいた表記および読解との関係に似ていると言えよう。

記号論はまた言語学にも近い。後者は通信系の中で最も完全無欠な体系である人間の言語を研究するからである。

記号論は言語学、サイバネティックス（情報理論を含む）、生物学、心理学、社会科学（民族学と社会学）、文化史、文学研究などから研究資料を得るが、同時にその返礼として、これらの科学に自身の一般的結論を与える。この科学は諸科学の接点において発展していくのである。

一連の諸科学の中で記号論とサイバネティックスが占める中間的な位置は、原則として、これらの諸科学中の任意の科学から前二科学すなわち記号論とサイバネティックスへの移行を可能にする。この方法は実際にいくつかの研究書において利用されている。たとえば、生物学を窓口とするサイバネティックス入門（W. Ross Ashby, 1956）、美学からのサイバネティックス入門（A. Moles, 1958）。言語学からの記号論への入門（L. Hjelmslev, 1943; V・V・マルトゥィノフ、一九六六年）[2]等々。本書の著者は言語学者であり、本書は言語学、文化史、文学研究などを窓口とする記号論への入門書である。しかし本書は、少くとも、ある程度見方を変えれば、言語学への記号論的入門として読むこともできよう。

一連の諸科学の中で記号論が占める中間的位置、そして記号論が現代の体系－構造的研究の最も形式の整った部分であるという事実から、記号論を哲学と類比させることができる。

「マルクス・レーニン主義は、巨大物体と微小物体、宇宙と中性微子（ニュートリノ）、物質と反物質、空間と時間、社会と人間、有機体と意識等々がそれぞれ構造を有することを否定するものではない。それは構造および構造的法則性の研究を求める。このことは、もちろん、正しい。しかし構造および構造的法則性の研究は、個別的（専門的）諸科学（とりわけ、記号論－Yu・スチェパーノフ）の課題であることも同じ程度に正しい。これに対し、哲学は存在と意識、社会的存在と社会的意識との関係を取り扱う。構造を持たぬ存在、構造を持たぬ意識は存在しないという事実の確認は、当然ながら、社会的実践と認識の歴史全体についての哲学的総合に基づく弁証法的唯物論、史的唯物論による根本的、世界観的結論の再検討を惹き起こすものではない。

個別（専門）科学的研究の力を借りて哲学研究を具体化することが可能であり必要であるというこ

とは疑う余地がないが、だからといって、マルクス・レーニン主義の科学的世界観を〈伝統的諸問題〉に対する〈体系－構造的アプローチ〉に基づく何らかの〈新しい〉世界観によって置き換えることが可能であり必要であるというわけではない。」（T・パブロフ「マルクス・レーニン主義哲学と体系－構造的分析」『コムニスト』誌、一九六九年、第十五号、一二八頁）。

記号論（およびサイバネティックス）が持つこの性質（哲学との直接的近似性）により、原理的にはこれら二科学から哲学、特に認識論へきわめて自然に容易に移行することが可能となる。実際すでに言語学からの認識論入門書（A・F・ローセフ、一九六八年）[3]、サイバネティックスからの入門書（たとえば、G・クラウス、一九六一、一九六三年、I・ゼーマン、一九六二年）[4]等が出ている。記号論のこの特性はここでも利用されており、本書はまた、記号論からの認識論入門の試み、認識論への記号論的入門でもある。

数学以外のすべての科学同様、記号論は多かれ少かれ形式化された部分を有するだけでなく（第二章4の「抽象的記号論」がそうである）、諸事実の広範囲の観察も行なっており、そこでは記号論は、生物学、言語学と同様に帰納的科学である。記号論学者は、旅行者、生物学者、民族学者、言語学者、ありとあらゆる、そしてとりわけ人間的な自然の忍耐強い研究者と同様に、原始社会の諸種族や現代の工業都市など、至る所を観察する能力を持たねばならない。

第一章　事実とその最初の説明

(1)　記号論が研究する諸事実

あらゆる新しい科学部門はその目的を持っている。すなわち、それは一定の事実の研究と説明のために形成されるのである。記号論は、とりわけ、作家や旅行家など、人類についての好奇心旺盛な観察者たちによって古くから大量に蓄積されてきた諸事実の説明を行なう。

ロモノーソフが述べた諸言語の相違に関する名言はよく知られている。神聖ローマ帝国皇帝カール五世が言ったように、スペイン語は神と語るにふさわしく、ドイツ語は敵と、フランス語は友と、イタリア語は女性と語るにふさわしいが、ロシヤ語は「これらすべてと」語るにふさわしい。この箴言には、言語と民族性との類縁性についての深い考えが秘められている。ゴーゴリもまた同じことを言ったし（「ロシヤ民族は物言いが痛烈である！　もし誰かが手厳しい言葉を頂戴しようものなら、その言葉は一族子孫にまで伝わるだろう……」（『死せる魂』第一部第五章）、プーシキンの同時代人P・A・ヴャゼムスキーによれば、「フランス的機知は言葉で冗談を言い、それはうまい言葉の選択で異彩を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

放つ。ロシヤのそれは矛盾する観念をうまく取り合わせて冗談を言う。フランス人は耳で、ロシヤ人は目で、冗談を味わう。ロシヤの冗談はほとんどどれも一枚の戯画になる。われわれの冗談はどれも顔をもっている……」という（『古い手帖』全集第九巻、二二頁）。最後にプーシキンの言葉を挙げておこう。

「思想と感性の様式というものがあり、ある民族だけに属する風習と信仰と習慣は無数にある。」（未完の論文「文学における民族性について」）

I・エレンブルクは中国について次のように書いている。「ある作家が私にこう言った。『私はあなたに今まで会えませんでした。妻が重い病いに罹り、三日前に死んだのです。』こう言いながら彼は笑ったのだ。私の体に悪寒が走った。だがそのあとで私はエミ・蕭（シャオ）の言ったことを思いだした。『私たちの国では悲しい出来事を語る時に微笑みます。これはつまり、聞き手を悲しませてはいけないということなのです。』[1]」

エレンブルクは続ける。中国に来て初めて彼は風習、習俗、礼儀の約定性について考えさせられた。ヨーロッパ人は、挨拶するとき、握手するために手を伸ばす。これは中国人、日本人、あるいはインド人を驚かせるばかりか反感を惹き起こす行為である（他人の手を握るなんて！）。ウィーンの人は言葉の意味に思い悩むことなく「お手にキスを」と挨拶するし、ワルシャワの人は、婦人と引き合わされるとき、実際にその手にキスをする。英国人は手紙の中で商売敵を詐欺師と非難するときでさえ、Dear Sir で手紙を書き出す。キリスト教の男性信徒は、カトリック、プロテスタントを問わず、教会に入るときに帽子を取るが、ユダヤ教では会堂（シナゴーグ）に入るとき頭を被う。カトリックの国々では、女性は頭に何も着けずに教会に入ってはいけない。ヨーロッパでは喪の色は黒だが、中国は白である。欧米

の男性が女性と腕を組んで歩いたり、時にはキスさえするのを初めて見る中国人はこれをひどい恥知らずの行為と考えるだろう。北京のホテルの家具類はヨーロッパ式だが、部屋の入口は伝統的な中国式であり、真直ぐ中に入れぬよう衝立で仕切ってあった。これは、悪魔は真直ぐに歩くという中国の言伝えから来ている。ロシヤの悪魔は、反対に、狡猾（ルカーヴイ）でいつも脇から曲線をえがいて入り込む。（「狡猾（ルカーヴイ）な」は「ルカー」〔「屈曲、「弓形」の意〕という語からの派生語である。）ヨーロッパ人を訪ねた客人が壁の絵、花瓶その他の小間物に感嘆の意を表わせば、主人は満足するだろう。ヨーロッパ人が中国人の家でなんらかの品を賞賛しだすと、主人はその品を客に贈るだろう。それが中国式礼節なのである。われわれは、客に招かれたら皿に何も残してはいけないと子供たちに言う。が、中国では食事の最後に供される一杯の乾し飯に手をつける者はない。礼儀作法にしたがって満腹の意を示さなければならないのである。

エレンブルクはこれらの観察を次の考察で締めくくる。「幾分慣れてきて、私は生活の内容よりもその形式の方が、私に身近なものとははるかに違っているのだとわかった。ネルーダと私は墓地に行き、魯迅の墓前に花を供えた。そこで私たちは知り合いの中国女性に出会い、蔣介石軍の犠牲者達の合同墓碑を見つけた。彼女はここで夫の遺骨が見つかるだろうと思っていた。彼女はこの場合の礼儀にしたがって笑おうとしたが、耐えきれず、わっと泣き出した。[2]」

このような観察から当然一つの疑問が生ずる。エレンブルクが「生活の形式」と名づける姿勢、身振り、ある種の顔の表情、作法などは、内容というよりも、むしろ、感情、体験、信仰といった「生活の内容」の記号ではないだろうか。しかも、ある国、ある民族においてのみ採用されている記号で

はないか。

この場合、肯定の答えが自ずと出てくる。そしてこの種の観察は当然、次の第一の結論にまとめられる。すなわち、人々の感情、体験、信仰は、姿勢、身振り、作法といった特別な形式をまとって行なわれる。これらの形式はその本質上二元的である。つまり、それらは体験、感情、信仰そのものの一部をなすと同時に、純粋に伝統的なものとなり、ある程度までそれとは距離を置いた、その一部、その外的な現われ（この現われがその記号となることができる）でもある。

続いてすぐにもう一つ新しい疑問が起こる。これらの外的な記号は、同一の人類普遍の感情、体験の、さまざまな民族的、伝統的形式に過ぎないのだろうか、ちょうど同一の思想が様々な民族言語によって伝達しうるように？ それともこれらの外的な現われは深い内容を持ち、慣習の外面的な相違、これらの記号の相違は、異なる社会集団と民族全体間の感情と体験（無論、信仰も）の深い差異を表わすのだろうか？

観察者たちは、この問いに様々な解答を与えてきた。すでに見たように、エレンブルクは、おそらく、初めの答えに傾き、一般に「生活の内容よりその形式が違う」と考えた。しかしこれと全く異なる答えも、劣らず説得的である。この答えは、人々の、空間、時間、色彩、自然一般に対する様々な態度を観察してきた民族学者によって、とりわけはっきりと根拠づけられているのである。

異なる民族文化に育った人々が、アメリカの研究者E・T・ホールの言葉で言えば、その国で採用された「モデル」(patterns) に応じて空間に対して本質的に異なった態度をとるのを見るとき、我々は、空間に対する態度が、人間行動の、一定の様式によって規則化された一つの様態であることを

はっきりと理解する。ホールによれば、近東諸国で彼は自分がまるで人混みの中にいるかのような感じを受け、それはしばしば不安の感覚を惹き起こした。住居や職場の造りがアメリカのそれとは全然違うので、彼の同国人たちはこれに適応するのに困難を覚え、場所がせますぎたり広すぎたりして無駄にされていることについて絶えず苦情を洩らすのだった。空間組織の相異はこれに止まらない。日本では交差点には名前があるが通りそのものにはない。アラブ人はどう行けばよいかという簡単な質問に対しても、アラビア式の方角指示の全体系をマスターしなければヨーロッパ人には役に立たないような教え方をする。プロシア出身のドイツ人にとってはたとえ人が戸口に立っていても、その人が部屋の中にいる相手を見て話しをすることができれば「部屋の中にいる」ことになる。アメリカ人にとって「部屋の中にいる」というのは、体が全部中に入り、手をドアの側柱から離すことができる時だけである。コロンビア人やメキシコ人はしばしば話相手の北米人が冷淡で他人行儀な態度をとると考えるが、これは、コロンビア人が話を始めるのに具合よいほど接近したと考える丁度その時に、北米人は自分の身体に触れられるのをいやがって身を退けるからに過ぎない。[3] アメリカ人にとっての会話に適当な距離は七五センチだが、これはメキシコ人には遠すぎる。

このように、「生活の形式」、慣習は何か特別の、他民族には見られぬ国民性を実際に意味するものなのか、という問いに対して答える時、すでに第二の結論が出てくる。すなわち、意味しないこともありうるし、意味することもありうるのである。

民族学的観察からは全く明確な第三の結論が導き出される。すなわち、ここで問題となっている生活の外的形式は一定の様式により秩序づけられ、体系を形成しているのである。これは今までの諸例

からもすでに十分明らかだが、次に見るように、これらの体系はまだ、ある程度まで言語の体系と類似している。(すぐ前に言及したアメリカの民族学者ホールがこの問題を扱った自著を『空間の言語』と題したのも偶然ではない。) 事実この考えは、ほかならぬ言語学者たちによって最も正確に定式化された。「ある民族の慣習の総体は常に独特な様式により特徴づけられている。慣習は体系を形成する。私が確信するところでは、これらの体系は無際限に存在するのでもないし、人間社会は、個々の人間と同様に、何か絶対的に新しいものを創造するのではなく、単に諸々の可能性の理想的なそして計量可能な集合からいくつかの組合せを構成するだけである」、とデンマークの言語学者V・ブレンダルは一九四三年に書いている。(4) 歴史的創造についての彼の考えには、多分彼の言語解釈同様、全面的に賛成はできないが、その、慣習の体系と言語、しかも高度に形式的な言語(「計量」)との間の類似性(ラング)の考察は極めて注目に価する。

住居や公共建築物などの空間、色彩、時間に対する人間の態度についてのこれと同様の観察は他にも容易に挙げられる。時間は空間に劣らず重要な、行動の部分である。多くの国では夜十時頃の電話は公用ではありえない。客は午後五時前に招かれたのか五時過ぎかによって異なった感じ方をする。正式なレセプションにおいて時間は衣服で強調される。衣服そのもの、特にその型と色は会話の作法に劣らず雄弁である。

一種の言語としての色彩、つまりなによりもまず色彩の持つ意味については誰もが非常によく知っているので、ここでは一例だけ挙げることにしよう。(チェーホフ『三人姉妹』I)

（ナターシャ登場、バラ色の服を着て、緑色のバンドをしめている）

ナターシャ　名の日おめでとう！　でも、お宅があまり大勢にぎやかなので、とても困ったわ。

オリガ　なにいってるの、みんな身内ばかりよ。（小声で、ぎょっとしたように）　緑色のバンドをしてきたのね！　あなた、それよくないわ！

ナターシャ　何か悪い前兆かしら？

オリガ　ううん、似合わないというだけのこと……それに、変ね……

ナターシャ（泣き声で）そうかしら？　でもこれ緑色でなくて、もっと、くすんだ色よ。（オリガのあとから広間に行く）

三人姉妹とナターシャの来たるべき衝突、二つの世界、二つの文化の衝突がこの場面で、この色をめぐる食い違いで一度に示されている。

空間に対する人々の関係が最もはっきり現われるのは建築であり、建築は一つの文化の枠内、たとえばヨーロッパ文化の枠内において比較的短期間にこの関係がどのように変化するかをよく気づかせてくれる。

ラリーサ・レイスネルは革命直後の冬宮を次のように記した。「そして内部では毀れた窓、もぎとられた枠などいかなる破壊も、回廊の軽快な歩み、壁と天井の均衡、半円形の広間、そして何よりも驚嘆すべきそして世界に二つとない影と光の配置とをこの建物から奪い去ることはない。

各室の戸口からすぐ中の窓を見ることができる。それは高い、一枚仕上げの窓で、一つ一つの窓の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.